

大学生の死生観形成について ： 看護学生と他学部生との比較（研究報告）

著者	瀧川 薫，田中 智美
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	10
号	1
ページ	16-21
発行年	2012-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10422/735

—研究報告—

大学生の死生観形成について

—看護学生と他学部生との比較—

瀧川 薫 田中智美

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

要旨

看護系大学の学生は4年間の教育課程を経て、現実的な“生”や“死”と関わり、他者や自分自身の生死について深く考察する機会を与えられる。そして、様々な経験を通じ医療従事者として必要とされる肯定的な死生観を構築する。看護学生は、他の学部生の死生観より成熟した考え方を有しているものと考えられ、双方の学生の死生観の差違と影響を与えた要因を探るべく調査を実施した。その結果、学生の死生観に影響を与える要因として家族構成・入院経験・死別体験が考えられ、核家族世帯で育った学生の方が死を生への諦めや回避とみなす傾向が認められ、入院経験や死別体験など自身の直接的な経験は死への恐怖を減少させることが明らかとなった。また、看護学生は臨地実習を通して、死は単に現世から逃れる術や生の諦めとして表現されるものではないということを理解していた。

キーワード：死生観、看護学生、大学生、死に対する態度

はじめに

医療従事者は、常に人間の生と死を見つめながら、自身に求められている職務を全うしなければならない。看護学生が近い将来、患者やその家族に対してより良い看護を提供するためには死への苦痛や恐怖といった感情に共感し、患者やその家族の思いを理解する姿勢が求められる。「自分以外の人格をケアするには、-中略- その人の世界がその人にとってどのようなものであるか、その人は自分自身に関してどのような見方をしているのかを、いわば、その人の目でもって見てとることができなければならない」と、ミルトン・メイヤーロフは「ケアの本質」で述べている¹⁾。患者理解を深めてより良い医療を提供するには、死を客観的・肯定的に捉えながら自らの死生観を構築していく過程は、看護教育において非常に重要である。

看護学生は生命の誕生から終結までを理解し、看護職者としてケアができるようになるために多様な知識や技術が必要である。大学で学ぶそれらは、青年期に

おける若者がそれまでの人生でおおよそ関わったことのない経験ばかりである。そのような過程を経て、看護学生は現実的な“生”や“死”を意識し、他者や自分自身の生死について深く考察する機会を与えられる。看護教育から得た知識や経験を通じて、死や病気、苦しみは単なる否定的な感情で表現されるものではないことに気づき、医療従事者として必要とされる成熟した死生観を構築していくと思われる²⁾。

しかし現代社会においては、平均寿命の延長や核家族化が進み、終末期を病院で過ごし病院で死を迎えることが多く、若者自身の直接体験として、死にまつわる経験の機会は少なくなっている。その一方で、様々な形で死に関わるニュースはメディアを介して容易に日常世界に運ばれてくる。ゲームの仮想世界では、自身の死さえ体験できるという特殊な現代の状況下で、若者は死についていずれは自身に起こりうる現象として捉えることが困難となってきた。このため、死や生について考えさせられる経験のある看護学生と一

般の大学の学部生との死生観にはなんらかの差違が認められる可能性がある。そこで、看護学生の方がより肯定的で成熟した死生観をもつものと考え、現代の大学生の死生観形成に影響を与える要因と共に検討した。

研究方法

1. 調査対象

近畿圏内の医学部看護学科の4年生・3年生・2年生の女子学生を対象とし、比較対照者は死生観に関連した教科目が開講されていず調査協力の得られたR大学理工系学部の4年生・3年生・2年生の女子学生に対して調査を実施した。いずれも編入学生は除外した。

2. 調査方法

調査方法として、丹下による「青年期における死に対する態度尺度」^{3・4)}を採用し、臨地実習の経験以外に個人の死生観に影響を与えると考えられる属性として、既存の文献等を参考に、家族構成・死別体験の有無・入院経験の有無などの項目を設定した質問用紙を作成した上で、留め置き法により調査を実施した。

死に対する態度尺度の得点は、「死の恐怖」「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の各下位尺度に含まれる質問項目に対し、「そう思う」～「そう思わない」の5段階リッカートスケールで回答してもらい、合計得点を項目数で割ったものを下位尺度ごとの得点とした。高得点は、各下位尺度項目をより肯定することになる。

倫理的配慮として、調査用紙は無記名による記入で、大学や学部名は匿名化し、データはコード化して個人が特定されないよう配慮した。また、調査への協力の諾否は成績等は一切影響しないことを文書にて示し、調査用紙の返却をもって研究への最終的な同意を得たものとした。

3. 仮説および明らかにしたい事象

看護学生は看護教育を通じて死について考える機会を与えられることで自らの死生観を形成し、他学部生より死に対して客観的で肯定的な意見をもつ。

4. 用語の定義

死生観：死を通した生の見方をいい、死後や死者をどのように捉えるかなど、死や生についての人々の考え方や理解の仕方とする。

5. 分析方法

家族構成が死に対する態度に与える影響を明らかにするため、グループを「親のみ」「親と兄弟と暮らしている」と答えた群と、「祖父母も同居している」と答えた群の二群に分け、クロス集計を行った上でカイ二乗検定を実施した。また、入院経験の有無・死別体験の有無・臨地実習経験の有無による二群間比較でも同様の分析を行った。分析に際しては、統計パッケージソフトSPSS(version15.0)を使用し、「青年期における死に対する態度尺度」得点と各属性間での比較検討を試みた。

結果

1. 有効回答

研究協力に同意を得てそれぞれの学部配布した調査票各 300 部に対して、回収数はいずれも 130 部 (43.3%) で、看護学生は 113 名 (86.9%)、他学部生は 112 名 (86.1%) の有効回答が得られた。

平均年齢は、看護学生 21.2±1.3 歳、他学部生 20.1±2.8 歳であった。

2. 結果

看護学生と他学部生における「青年期における死に対する態度尺度」の下位尺度の各得点を表 1 に示した。

① 家族構成と死に対する態度

現在の家庭環境について、図 1 のように「一人暮らしをしている」と答えた者は、看護学生は 48.2%、他学部生は 63.7%、「友人又は恋人と暮らしている」と答えた者は看護学生・他学部生ともに 4%、「実家で暮らしている」と回答した者は、看護学生は 47.7%、他学部生は 31.2%であった。

また、実家の家族構成については、「親のみ」と答えた者は、看護学生は 15.0%、他学部生は 13.3%、「親・兄弟と暮らしている」と答えた者は、看護学生は 44.2%、他学部生は 49.1%、「祖父母も同居している」と答えた者は、看護学生は 26.7%、他学部生は 30.9%であった。

「親のみ」「親と兄弟と暮らしている」と答えた群の方が、回避的受容の得点が有意に高いことが示された ($\chi^2(1)=5.081$ $p<0.05$)。

② 入院経験と死に対する態度

入院経験の有無については、表 2 のように「有り」と

答えた者が看護学生は39.8%、他学部生は27.6%であった。また、入院経験のある群の方が死の恐怖の得点が有意に低いことが示された($\chi^2(1)=5.700$ $p<0.05$)。

表1 看護学生と他学部生の「青年期における死に対する態度尺度」の各得点

	全体 (n=225)	看護学生(n=113)		他学部生(n=112)		P値
	平均値±SD	平均値±SD	最小-最大	平均値±SD	最小-最大	
死の恐怖	3.38±0.74	3.34±0.77	1.57-5.00	3.43±0.71	1.57-5.00	0.084
積極的受容	2.41±0.70	2.39±0.74	1.00-4.50	2.43±0.65	1.00-4.00	0.068
中立的受容	3.04±0.80	2.98±0.77	1.00-4.33	3.10±0.83	1.00-5.00	0.196
回避的受容	1.85±0.73	1.84±0.70	1.00-4.17	1.85±0.77	1.00-5.00	0.072

($p<0.05^*$, $p<0.01^{**}$, $p<0.001^{***}$)

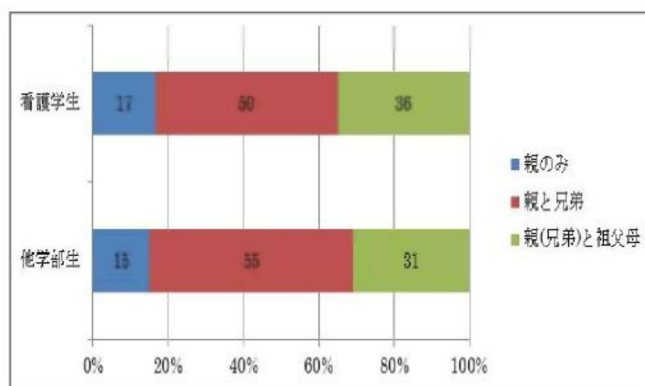


図1 学部別の家族構成の違い

表2 入院経験の有無

	看護学生	他学部生	合計
入院経験あり	45(39.8%)	31(27.7%)	76(33.8%)
入院経験なし	68(60.2%)	81(72.3%)	149(66.2%)
各学部の学生数	113(100%)	112(100%)	225(100%)

③ 死別体験と死に対する態度

死別体験について、図2より「死別体験があり、臨終の場面に立ち会った」と答えた者が、看護学生は15.0%、他学部生は16.0%、「死別体験はあるが、臨終の場面には立ち会っていない」と答えた者が、看護学生は73.4%、他学部生は64.2%、「死別体験はない」と答えた者が、看護学生は11.5%、他学部生は19.6%であった。

近親者を亡くした経験のある学生と、そのような経験のない学生を比較・検討したところ、二群間に有意

差は認められなかった。次に、死を直接経験した者とそうでない者の死に対する態度を比較するため、「死別体験があり、臨終の場面に立ち会った」と答えた群(35名：全体の15.6%)と、「死別体験はあるが、臨終の場面には立ち会っていない」「死別体験はない」と答えた群(190名：全体の84.4%)で比較した結果、「死別体験があり、臨終の場面に立ち会った」と答えた群の方が、死の恐怖においての得点が有意に低いことが示された($\chi^2(1)=6.319$ $p<0.05$)。

④ 臨地実習の経験による死生観の変化

臨地実習の経験による死生観の変化を明らかにするため、看護学生(339名)のみを対象とし、すべての実習を終えている4回生(132名)を臨地実習経験のある群、2・3回生(207名)を臨地実習経験のない群と考え、同様の分析を実施した。

その結果、臨地実習経験のある群の方が、回避的受容において有意に得点が低いという結果が得られた($\chi^2(1)=7.755$ $p<0.05$)。

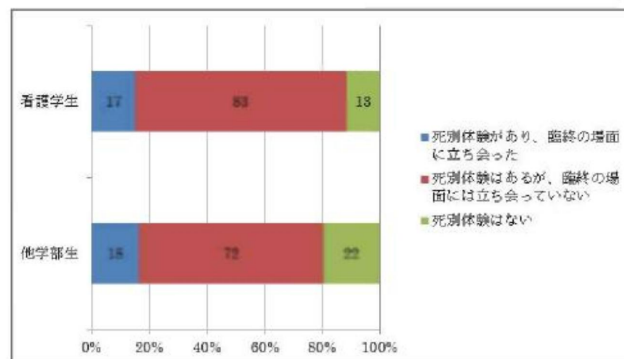


図2 学部別の死別体験の有無による比較

⑤ 死についての省察

死について、「深く考えた事がある」と答えた者は38.7%、「少しは考えた事がある」と答えた者は46.2%、「あまり考えた事がない」と答えた者は13.8%、「全く考えた事がない」と答えた者は1.3%であった。

死について考えることは精神発達上の一つの通過点であり、看護学生89.3%と他学部生80.3%が「深く考えたことがある」「考えた事がある」と答えていることから、大部分の学生が死について考えた経験のあることが明らかとなった。

どのような時に死について考えるかという設問への

自由記載では78.2%の学生から回答が得られ、最も多かった回答は、身近な人物の死を経験した時であり、次いでテレビで死傷者のニュースを見た時、気分が落ち込んだ時などであった。看護学生の中には「ターミナルの患者をみた時」や「実習中(病院)」「死を目前にした患者をみた時」といった回答もみられた(図3)。

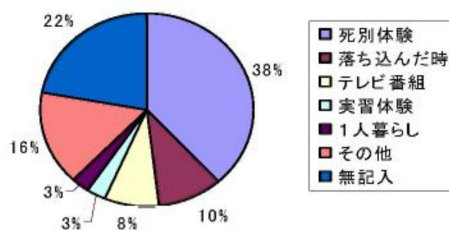


図3 学生が死を考えるきっかけとなった事象

⑥在籍している学部間による比較

本調査では、学部間での比較の結果として、得点に有意な差は認められなかった。

考察

1. 死生観に影響を与える要因

本調査で、グループ間の得点に有意に差が認められたのは、「家族構成」「入院経験」「死別体験」の3つの要因であった。

① 核家族で育った学生の死生観の特徴

家族構成においては、いわゆる核家族の世帯で成長してきた学生の方が、そうでない群より回避的受容の得点が有意に高く、死を生への諦めや現世からの回避として受容する傾向があることがわかった。これは、核家族で育った学生は、一般的に自分より死に近く、より成熟した死生観をもつとされる高齢者と日常的に接する機会が少なく、高齢者と死について語り合う経験もないため、死を遠い未知の出来事として理想化し、現実の苦悩から回避する方法として捉える傾向があると考えられる。青年期の始まりとともに繰り広げられる心身の発達が様々な混乱や不快感を生じさせ、青年は情緒的な不安定性や自己評価の動揺を体験する⁴⁾。しかし、家族構成が青年期の若者の死生観の構造にどのような影響を与えるかという先行研究はなく、他の報告と比較できないため、今後とも検討が必要である。

② 死の恐怖を軽減する要因

入院経験と死別経験の有無では、共通して学生の死の恐怖の得点に差が認められ、入院や死別を実際に経験した学生の得点の方が経験のない学生の群より有意に低かったことから、このような経験を通して、学生の死に対する恐怖は軽減する傾向にあるといえる。

丹下は青年期における死生観の展開に関する研究で、「青年期にいるといえども自己の死がすぐにでも起こりうるのであるという事を実感させられるような経験をすることによって死生観が影響を受ける」⁶⁾と指摘しており、入院の原因となった病気や事故といった体験から直接的に自身の生命の危機を感じ、死について考えていく過程で、死への恐怖は次第に軽減していったものとする。

また、死別体験については、近親者を亡くした経験のある群とない群では得点の有意差は認められなかったが、一方で近親者の死に行く過程に立ち会った経験のある群とない群では有意差が認められたことから、死への恐怖が軽減するには死の過程に遭遇するという経験が重要と考える。親しい人が生から死へと向う過程を観察し、その死に対する悲嘆体験を積み重ねることで学習し、死への理解の程度が高まっていくとの指摘もある⁷⁾ことから、学生が死に遭遇し、未知の事象であった死を理解するという経験は、死に対する恐怖の軽減につながるものとする。

これらから、青年期の若者にとって死は未知の事象であり、自分にとっては遠いところの存在と認識していた死を、自身の生命の危機や他者の死に遭遇することで身近な存在と感ずることにより、徐々に死への理解が深まり、恐怖感は軽減されるものと考えられる。

2. 臨地実習で学生が学ぶこと

看護学生の得点分析から、臨地実習経験のある学生の方が回避的受容の得点が低い傾向にあるという結果が得られた。看護学生は臨地実習での患者とのかかわりの中で、死に対する恐怖は抱きつつも、死という事象を否定的に捉えるのではなく、医療の現場に立つものとして“生”や“死”と向き合い、死は単に現世から逃れる術や生の諦めとしてのみ表現されるものではないということに気づいたためと考える。

しかし、本調査では看護学生と他学部生との死に対する態度についての差異は認められなかった。これは看護教育を受けることで、人間の生命について考える機会を与えられ、命の大切さを学ぶことはできても、実際の死に遭遇する経験は皆無であるため、死について客観的・肯定的に捉え、死生観を成熟させるという段階まで達することが困難であったと考える。

本調査でも、自身が直接死にかかわるような経験することは、死に対する恐怖の軽減につながるという結果が出ている。しかし医療従事者として大切なのは、病人が死について語りたいというニーズをもつ時、周囲の者が自分自身の不安や恐怖のために、無意識のうちにそれを封じてはならないということであり⁸⁾、看護職者として医療の現場に立った時、自身の死への恐怖から死に直面した患者の苦悩を共有できないといったことのないよう、看護学生の死生観の成熟を促すための教育内容や方法の改善・工夫が求められる。

3. 青年期における死生観

死についての最初の関心は、学童前期での、生命が終わるという不可逆的な現象を理解できないことに結びつく⁹⁾とされる。この時期は、ある時点で人が死んでも次の瞬間には生き返ると考える。学童中期になると、死についてはかなり現実的な認識をもつことができるようになるが、死を自分や周囲の人と関連つけて考えられない。青年期における個人的同一性を形成する過程で、死ぬ運命・人生の意味・死後の生命の可能性について疑問をもつようになり、死についての見方も次第に形成されはじめる。

青年期には、自我や自己といった領域と死に対する態度の発達に相互に影響を与え合いながら進行し、青年期に死の主題を扱うことがその後の人生に対する基盤を形成することにも関連する³⁾とされ、この時期における直接的・間接的な死についての体験は、その後の人生における死生観や自身の“生き方”にも影響を及ぼす。よって、看護学生に限定すると、この時期に形づくられる死生観は、臨床での患者に対するケアの態度にも大きく影響するため重要であるといえる⁵⁾。

また死生観は、直面することを余儀なくされた“死”の経験により受動的に形成されていくだけではなく、

能動的にその問題を自己の内部で扱い、吸収していこうとする過程によっても肯定的な死生観が形成され、その過程は人生に対して積極的な姿勢をもつことにもつながる⁶⁾。“どのような体験をするか”という事実よりも、その経験をした後に個人がどのような形でその事実に対処していくか、どのようにその事実を受容するかが重要である。したがって、死に対する学生の死生観形成は、受動的な体験の結果によるというより、受動的な体験を個人がどのように認識したかという結果であり、そこでの教育的支援も必要不可欠と考える。

結語

看護学生と他学部生を対象に、これまでのどのような経験が学生の死生観に影響を与え、それにより死に対する態度はどう変化したかを検討し、また臨地実習が看護学生の死生観にどのような影響を与えたかを検討したところ、以下のような結論を得た。

1. 学生の死生観に影響を与える要因として、①家族構成、②入院経験、③死別体験が考えられ、家族構成については核家族世帯で育った学生の方が死を生への諦めや現世からの回避としてみる傾向があることが明らかになった。また、入院経験や死別体験などの自身の直接的な経験から生や死について考えた学生は、死への恐怖が薄れるということも明らかになった。
 2. 看護学科の中でも臨地実習を経験した学生の方が、していない学生に比べて回避的受容の得点が有意に低いという結果が得られ、学生が臨床実習において、死は単に現世から逃れる術や生の諦めとしてのみ表現されるものではないということを学んでいた。
- 看護学生と他学部生の死に対する態度尺度を用いた調査結果として、その得点に有意差はみられなかった。しかし、看護学生は他学部生と比較して、臨地実習を経験することで死生観が形成されていた。「看護学生は大学生よりも肯定的な死生観をもっているものの、大学生よりも死の不安が強い」⁸⁾という報告もあるため、さらなる検討が必要である。

引用文献

- 1) ミルトン・メイヤロフ, 田村真ら(訳): ケアの本質 -生きることの意味-, ゆみ出版, 1987.
- 2) 岡本明美, 眞嶋朋子, 増島麻里子ら: 大学の教養教育課程における死生観教育のあり方の検討. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 33, 1-9, 2011
- 3) 丹下智香子: 青年期における死に対する態度尺度の構成およびその妥当性・信頼性の検討. 発達心理学研究, 70, 327-332, 1999.
- 4) 丹下智香子: 青年期・中年期における死に対する態度の変化. 発達心理学研究, 15, 65-76, 2004.
- 5) 加藤和子, 百瀬由美子: 看護学教育における看護学生の死生観に関する研究. 愛知県立大学看護学部紀要, 15, 79-86, 2009.
- 6) 丹下智香子: 死生観の展開. 名古屋大学紀要, 42, 149-156, 1995.
- 7) 糸島陽子: 死生観に関する調査. 京都市立看護短期大学紀要, 30, 141-147, 2005.
- 8) 橘尚美: 医療を支える死生観 -医師へのインタビュー調査を通じて-. 関西学院大学社会学部紀要, 97, 161-179, 2004.
- 9) 鹿村眞理子: 看護学生の死に関する経験とイメージとの関連, ヘルスサイエンス研究, 14(1), 103-108, 2010.
- 10) 玉垣まゆみ, 乗越千枝, 仁科祐子: 臨地実習における看護学生の死についての語りの実態. 米子医学雑誌, 61, 3, 80-86, 2010.
- 11) 山下恵子, 赤沢昌子: 学生の死生観の状況と看護・介護学生間の比較. 松本短期大学研究紀要, 19, 73-80, 2010.
- 12) 森末真理: あなたと死 -非医療従事者の死に対する意識調査-. 川崎市立看護短期大学紀要, 8, 67-76, 1996.
- 13) 河合千恵子・下仲順子・中里克治: 老年期における死に対する態度. 老年社会, 17(2), 107-116, 1996.
- 14) シュナイドマン, E. S, 白井徳満ら(訳): 死にゆく時-そして残されるもの. 誠信書房, 1980.
- 15) バーバラ・M・ニューマン, フィリップ・R・ニューマン, 福富護(訳): 生涯発達心理学-エリクソンによる人間の一生とその可能性. 川島書店, 1980.